

# 令和4年度松山都市圏パーソントリップ調査 分析レポート

増田 慧樹

東京大学 工学系研究科 社会基盤学専攻

令和４年度に松山都市圏（松山市、伊予市、東温市、砥部町、松前町）で行われたパーソントリップ調査の分析結果から、松山都市圏の都市計画・交通計画の現状と課題を整理する。

# 目次

第 1 章	はじめに	5
第 2 章	データの概要	7
第 3 章	松山都市圏全体の分析	9
第 4 章	各地域の分析	11
第 5 章	都市圏の課題と政策の提案	13
第 6 章	おわりに	15
参考文献		17



## 第1章

# はじめに

都市部と地方部の人口の極端な偏り、少子高齢化による地域の衰退、公共交通のサービス低下、気候変動による災害リスクの増加など、日本の地方都市では、多くの課題が顕在化している。私たちは、高度成長期の終わりから散々危惧されてきた上記の課題に対して、未だ有効な解決策を打てているとは言えない。都市計画分野では、コンパクトシティの理念のもと、立地適正化計画が各自治体で策定され、公共交通の利便性の高い地域に居住と都市機能を集約し、効率的な都市運営が目指されている。しかし、実態は、資産価格の下落を懸念する既存の住民との調整は困難であるため、集約ゾーンの保守的な決定と、強制力の低い政策に終始しており、目指す都市像が達成できるかは疑問である。交通計画においても、公共交通の利用促進や、歩行者まちづくり、自動運転・デマンド交通システムの導入が、さまざまな自治体で検討されているが、依然として自動車に過度に依存した社会から抜け出せてはいない。

重要なことは、これらの政策は目的として語られるべきではなく、手段のひとつに過ぎないということだ。全ての地域に適用できる特効薬などあるはずもないから、政策ありきではなく、地域で人がどのように生活し、何に困っているのか、あるいは今後困ると予想されるのかを、まずは地道に見つめ直さなくてはならない。その根拠の一つとなるのが**データ**である。松山都市圏パーソントリップ調査では、松山都市圏に住む 19000 人以上の生活が記録されている。子育て世帯、高齢者、高校生、一人暮らしの会社員、郊外に住む人、街中に住む人、さまざまな人の日々の活動と移動が収められている。ここに記録されていることを丁寧に、網羅的に解釈することで、冒頭の表層的な課題の根本にある、ひとりひとりの生き方が深い理解として得られるだろう。そうして見出された地域の実情をひとつひとつ汲み取って、将来に向けて計画していくことでしか、地域を良くすることはできないのではないか。

しかし、データは、データ単体としては力を持たない。膨大なデータを前に、何に着目するのか、どのような分析を行うかは、分析者の裁量であり、分析者の価値観が反映される。そのような価値観は、地域を実際に歩き、観察し、語り合った経験からしか生まれない。また、一人の分析者が経験し、感じ取れることには限界がある。データが地域を良くするためにあるのならば、どのような分析を行うか・何に着目して何を示すかという分析のプロセス自体に、住民が関わる必要があると考える。本レポートでは、私が現時点での経験から着想しうるデータの分析を列挙するが、地域に生きる人がそれぞれの問題意識をもとに、本レポートの分析の視点をアップデートしていくことを望む。

また、そのためのツールとして、データ可視化ダッシュボードを開発している。本文書やダッシュボードを地域の人が囲みながら、自分とは違う人の生活や困難に目を向けることで、まちづくり活動や行政の計画に地域を生きる人の視点が反映され、誰もが生きやすい地域が実現されることを目指していく。



## 第 2 章

# データの概要

- 世帯票
- 世帯個人票
- 個人票
- 付帯調査票





## 第 3 章

# 松山都市圏全体の分析



## 第 4 章

# 各地域の分析

解析結果を図や表を用いて示します。



## 第 5 章

# 都市圏の課題と政策の提案

結果についての考察を行います。



## 第 6 章

# おわりに

報告書の結論をまとめます。





## 参考文献

- [1] 著者名, 論文のタイトル, ジャーナル名, 2020.